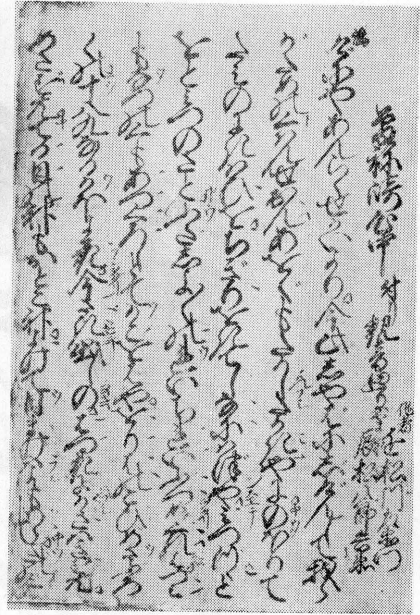


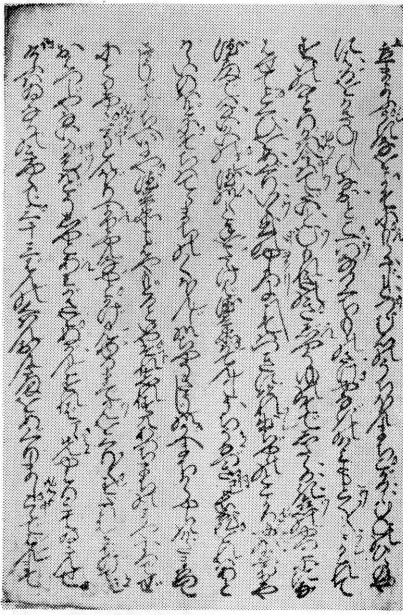
Title	曾根崎心中：竹本義太夫の正本
Sub Title	Takemoto Gidayu's first edition of Sonezaki-Shinju
Author	渋井, 清 (Shibui, Kiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.24, (1967. 12) ,p.111- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00240001-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



2丁 オモテ



4丁 オモテ

資料紹介

曾根崎心中

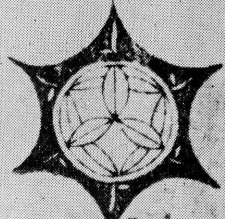
——竹本義太夫の正本——

渋井清

今日では、「曾根崎心中」といえば、ア、あの近松
△一六五三—一七二四▽の名作か、といって、まず文学
として思うかべるのが普通である、がその当時にあつ
ては、状況はいささか異っていた。

心中が実際にあつたのが元禄十六年の四月二十三日で
あり、そして、そのすぐ翌月の七日には、この事件を当
込んだ際物浄瑠璃として、その初日が、大坂道頓堀南詰
の竹本座において、ふたあけされた、ものなのである。

そして、この浄瑠璃芝居は、空前の当りをとつたので



竹本流 博教 正末

そ

若孫平

正徳元年

平野

大坂

大坂

松本

直正本
山平九

正本 表紙



外記 墨書

したがって、この正本は、竹本座興行当初の正本として、みるべきであろう。

それはともかく、この曾根崎心中は、竹本義太夫の音楽、作詞者近松の文学、との連繫芸術として、元禄末に誕生した。

近松と義太夫の、そののちの十年間のコンビのトップをかざる記念的名作であった。

そして、この遺品は、江戸の山村座に多く出演して語った、薩摩外記の手沢本である。

わたくしは、元禄の江戸浄瑠璃の創始者、薩摩外記のことは、未だあまり調べてないが、たまたま、上方にあって、竹田出雲が、

竹田外記をとなえた記事を散見するとき、上方にあって「下地は好きなり」といはれた浄瑠璃のパトロン竹田外記と、江戸芝居にあっ

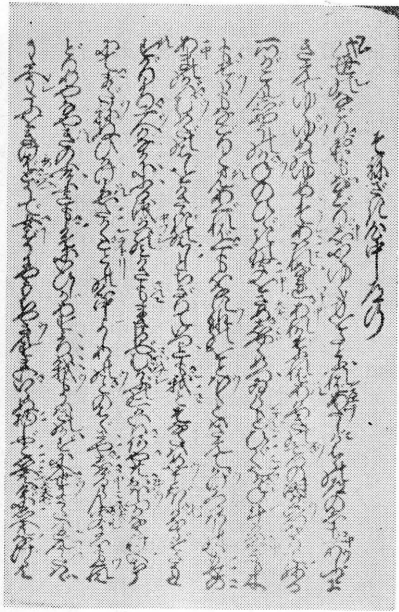
て、江戸浄瑠璃外記節を創始した薩摩外記との間には、なにか、一つのビジョンの大きな関係、を想見するのである。

竹田外記は、採算のあはぬ竹本座の座元を宝永二年以降引受け、義太夫、近松、のパトロンでもあった。

おやま形遣いの名手辰松八郎兵衛の名は記されているが、三絃者名は記されていない。ワキの声業者、竹本喜内、竹本頼母、まで記されているにもかかわらず、楽器伴奏者の名がないのは、当時であつては、音楽として聲楽に対し、器楽が重きをなさなかつた証左とみるべきであろう。後の書「牟芸古雅志」によると、この時、太棹を引いた者は、盲目の竹沢権右衛門であつた、と記されている。

この正本は、前三丁が八行で、後四丁から十五丁までが、詰込の十行になっていることも、際物的制作の過程を示している。

七味きん(竹本)



13丁 オモテ

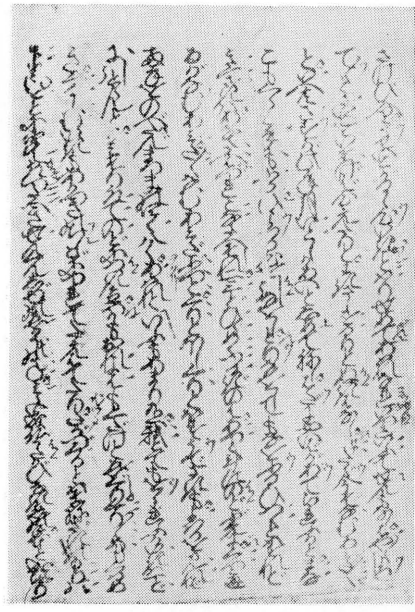
ある。

これは、音楽として又は浄瑠璃として生れたものなのであって、したがって、その音譜付正本は、江戸(時代)音楽の根本資料の一つなのである。

義太夫節の創始者竹本義太夫(一六五一—一七一四)が、竹本座に、はじめて櫓を揚げたのは、貞享二年、かれ35才の時であり、その後、筑後藤原博教を受領したのが51才の元禄十四年五月からであり、そして、この曾根崎心中を上演したのは元禄十六年の彼53才のときであった。

義太夫は、生来の美音で、声ながらが大音で、音質が爽かで、それに、甲乙かえつもすこぶる備っていたといふ、音楽家としての義太夫の偉大さは、邦楽の中に、その占むる比重を大きく、その後も永く義太夫節の名称を、今日にとどめている、ことよって明らかである。

今日この正本には、笹の紋所(八初型)の下に、「竹本筑後藤原博教正本」とあり、この直之正本の板元は「大坂かうらばし彦丁目山本九兵衛」とあり「彦段浄るりにかたり申候」とある。



15丁 ウラ

写真説明

- 正本 音譜付本文 袋綴 一冊
寸法 二一・六一一五・三 cm
表紙 一丁 ウラ白
丁数 本文 十五丁
行数 一一三丁 八行 四一十五丁 十行
装幀 山村座外本ぶし正本類と束綴合本。
備考 薩摩外記の手沢本。末丁に外記直筆と判ぜられる墨書年記がある。